

書評・紹介

Thomas CLEARY :

Entry Into the Inconceivable

An Introduction to Hua-yen Buddhism

赤尾 栄 慶

本書を見てまず目に付くのは、金師子を連想させる大理石のライオン像を配した紺青のカバーである。「Entry Into the Inconceivable An Introduction to Hua-yen Buddhism」と白抜きされた題をもつ本書は、中国華嚴宗に於ける観法の書を中心としてそれらを英訳したところにその特色がある。本書の構成は、まず華嚴教学の中心の問題を取り上げた Introduction と後に紹介する四つの典籍の翻訳及び華嚴経綱要ともいいうべき Appendix より成り立っている。

さて、近年、海外に於て華嚴仏教の研究が盛んに行われるようになったといわれるが、その理由の1とも考えられるものが本書のカバーの裏にある。すなわち、「華嚴思想の応用は伝統的な宗教(仏教)の範囲を越えて、現代の関心事―精神と環境及び個人と集団との関係―の領域をも包含するまでに広がっている。」と記されていることである。このように言われる背景に

は、現代社会に於ては我々の心とそれを取り巻く環境及び個人と集団社会との関係が有機的に機能していないということがあると考えられる。その解決の糸口を摸索するために、事事無礙、一即一切、一切即一、相即相入などといった用語を有する仏教の中の華嚴教学が注目されるに至ったと思われるのである。

次に著者について簡単に紹介しよう。著者は一九四九年に生れ、ハーバード大学に於て Ph. D. までの学位を取得されている。既に著者には数々の英訳があり、その代表的なものには禅の語録である『*The Blue Cliff Record* (碧巖録)』(Shambhala, Berkeley, Vol. 1, 1977-) があり、禅に造詣の深い研究者であると聞き及んでゐる。更には近々、Shambhala より『華嚴経』の英訳である『*The Flower Ornament Scripture*』を公刊予定とのことである。

二

まず翻訳の前にある華嚴教学概論ともいいうべき Introduction について紹介する。

Introduction は全体が

1. The Hua-yen Scripture (華嚴経)
 2. Hua-yen Studies in China (中国に於ける華嚴研究)
 3. Emptiness and Relativity (空と相関性)
 4. The Three Natures (三性)
 5. The Four Realms of Reality (四法界)
- の五項目に分けられてゐる。

第一の華嚴經の項では、その冒頭に「華嚴教学についての広い領域やその詳細を十分に理解するためには、經典それ自身を探究することがもちろん必要である。」(p. 319~21)とあるように、華嚴教学の解明にあたってはその正依の經典である『華嚴經』(本書に於ては八十卷華嚴經を用いている)そのものを熟読すべきことが述べられている。その内容は入法界品の善財童子の求道物語、すなわち菩薩道の実践を中心としている。その中、特に善財童子が弥勒菩薩の楼観に入る場面が、經典を引用しながら詳細に述べられている。これがまさに「Entry Into the Inconceivable (入不可思議)」であり、入法界であるといえよう。それ以外の各品については、巻末の「Appendix: Highlights of the Hua-yen Scripture (付・華嚴經のハイライト)」に譲るのである。

第二の中国に於ける華嚴研究に於ては、唐代を中心としながら諸宗(天台、三論、法相、禪、浄土)にも触れつつ、華嚴宗の五祖、すなわち杜順・智儼・法蔵・澄観・宗密、そして法蔵とほぼ同年代である李通玄や後の長水子璿、更には浄源についても紹介がなされている。諸宗の中では実践的な浄土教及び禪宗にその力点が置かれているようであり、特に澄観以後に交渉の深かった禪宗についてはかなり詳しく述べられている。

第三の空と相关性に於ては、著者の「華嚴仏教の哲学を探究するためには、空の教理―それは仏教にとって中心となる―を論ずることが必要なのである。」(p. 181~12~14)という観点により、空の問題を論じている。

第四の三性については、所謂華嚴三性説を取り上げている。著者は法蔵の『華嚴一乗教義分齊章(華嚴五教章)』義理分齊三性同異義(大正45・四九9a~)に於ける円成実性 (the true or real nature)・依他起性 (the relative nature)・遍計所執性 (the nature of conceptual clinging)の解釈に依りながら、三性の二義及び三性相互の関係を論じている。この三性説は、華嚴教学、その中でも特に法蔵の教学に於て重要な位置を占めているものである。

第五の四法界については、事法界 (the realm of phenomena)・理法界 (the realm of noumenon)・理事無礙法界 (the realm of noninterference between noumenon and phenomena)・事事無礙法界 (the realm of noninterference among phenomena)の中でも、理事無礙法界と事事無礙法界とを詳細に考察している。もちろん、この二法界は華嚴教学の中でも中心的な課題であるが、著者はまず理事無礙法界に関して『法界観門』所説の十門を取り上げ、その一一に解説を加えている。同様に事事無礙法界に於ても『法界観門』所説の十門それぞれに解説を加えるのである。そしてこの事事無礙法界は、華嚴教学に於ては十玄門・六相円融と展開されている。そこで次に著者は十玄門と六相円融について述べるのである。十玄門には古十玄と新十玄との二種があるが、今は新十玄を中心としている。六相円融については、延寿の『宗鏡録』巻第四十六(大正48・六九〇a~c)所出のものを引用して述べてあるのを見る。

以上、Introduction について紹介を試みたが、Introduction

に於ける著者の力点が第五の四法界の項にあることは明らかである。

三

次に本書の中心である Translations についての所感を述べることにする。ここに収められてゐる典籍は次の四である。

1. *Cessation and Contemplation in the Five Teachings of the Hua-yen* = by Tu Shun (『華嚴五教止観』杜順説)
2. *Mirror of the Mysteries of the Universe of the Hua-yen* = by Tu Shun and Cheng-kuan (『華嚴法界玄鏡』杜順撰・澄観説)
3. *Ten Mysterious Gates of the Unitary Vehicle of the Hua-yen* = by Chih-yen (『華嚴一乘十玄門』智徹撰)
4. *Outinuation of Contemplation of the Inner Meaning of the Hua-yen: The Ending of Delusion and Return to the Source* = by Fa-tsang (『修華嚴奥旨妄尽還源觀』法蔵説)

尚、翻訳にあたっては何を底本に定めたかといふことを明記することが必要であると思われるが、本書に於てはそれが明記されていない。そこで今は便宜上、大正大藏經所収本を底本と見なすことにする。

第一の『五教止観』から取り上げる。まず内容に触れる前に、この『五教止観』の撰述者の問題について論じなければならぬ。本書の撰述者については、従来より一応「杜順説」とされてきたが、わが国の学界に於ては結城令聞博士によつて「華嚴

五教止観撰述者論攷——五教止観」の杜順撰述説を否定し、法蔵撰（遊心法界記）の草稿なりと推定す」（『宗教研究』新七二、昭五・五）という論文が提出されて以来、『五教止観』は法蔵撰と見なされ、そのように扱われているのが現状である。それ故、本書に於て撰述者の問題が提起されていないことを残念に感ずる。例えば、この問題は本書に於て『華嚴五教止観』は、心の安定と分析的な観との継続的段階を体系的に記述したものである。この書は仏教の教えの主要な点を手短かに述べているものであり、またその組織立ては、後に法蔵によつて確立された華嚴宗の教相判釈の要素として展開されたのであった。（傍線筆者）(p. 127-19-24)と述べられている点にも影響を及ぼすことになるかと考えられる。

本文の翻訳に関して特に気付いた点は次のようである。まず漢文では「又経云、一切法皆空、無有毫末相、空無有分別、由如虚空有。門論云、無性法亦無一切皆空故」(大正45・五11a)と読むべきであろうと考えられる所が「Scripture also says, "All things are empty and have not the slightest sign; they are empty, without discrimination, just like empty space." The discussion on existence says, "The truth of naturelessness is also not so, because everything is empty." (斜体字は筆者)」(p. 55 f. 23-127)と訳されている。ここには「由如虚空有。門論云」という所が「由如虚空」とは『華嚴經』卷第二十五、十地品の偈頌(大正・五五八a)の

取意、或いは『仏藏經』卷上、念仏品(大正15・七八五a)の所説によつたものであろうし、次の「門論云」とは『十二門論』觀性門の偈(大正30・一六五a)と考えられる。それ故、「they are empty」以下は「they are empty, without discrimination, and just like empty space.」[*Shih erh men lun* (*Twelve Gate Treatise*) says...]とすべきかとも思う。前後が正確に訳されていただけに少しく残念である。

またこの『五教止観』には「仏授記寺」(大正45・五一〇c)という寺院名が出てくるのであるが、これを著者はただ単に「a monastery」(p. 52 f. 32)と訳している。実はこの「仏授記寺」という寺は、先述の結城論文にも既に指摘されているように、洛陽建春門内の敬愛寺という寺を則天武后が垂拱元年(六八五)に改めて仏授記寺と号したものの(旧唐書、列伝卷第一三三)なのである。それ故、この「仏授記寺」をただ単に「a monastery」と訳してしまうことは、『五教止観』の撰述年代を知る一つの手がかりを消失させてしまうことになる。これは固有名詞として「Fo shou chi ssu」と表記されることになり、杜順撰述説を否定する証左とも成り得るのである。それ故、この「仏授記寺」の語は慎重に取り扱わなければならないといえよう。尚、この『五教止観』には既に Lin Ming-wood 訳の「A translation of the Wu-chiao-chih-kuan ("On the Meditation of the Five Teachings")」(*Journal of Asian Culture* 1, no. 1, Los Angeles, 1977) という英訳が存する。しかし今はその雑誌を入手することが出来なかったため、ここに紹介するに止

める。

第二の『法界玄鏡』は杜順の『法界觀門』——これは独立の書としては現存していないが——に対する澄観の注釈書であり、所謂会本の形式を取っているものである。

同じく気付いた点を取り上げる。まず『法界觀門』の本文中にある「經云、法身流轉五道名曰衆生」(大正45・六七八c~九c)という「經云」を「The scripture says [in the book "A Bodhisattva Asks for Clarification"]」(p. 103 f. 32~f. 33)として、この經を「華嚴經」菩薩問明品と解釈している。しかし、この「經」は既に淨影寺慧遠の『大乘義章』卷第三末に「是以不增不減經言、即此法界輪轉五道名曰衆生」(大正44・五三〇c)として引用されているものであり、智儼や法藏などの華嚴家に於てもしばしば引用される經文である。そしてこれは『不增不減經』に「即此法身、過於恒沙無辺煩惱所纏、從無始世來、隨順世間、波浪漂流往來生死、名為衆生」(大正16・四六七c)とあるの取意の文と考えるのが一般的なのである。更にここに補われた「in the book "A Bodhisattva Asks for Clarification"」というの、八十卷華嚴經の品名である。今は『法界觀門』所引の經文であるから、たとえ『華嚴經』の經文であるとしても、それは六十卷華嚴經の「菩薩明難品」という品名を使用すべきではなかったらうか。

次にこの『法界玄鏡』の翻訳にあたっては、少なくとも都合六箇所にわたって澄観の釈の部分省略しているのを見る。確かに著者が指摘(Notes, p. 211, No. 9)しているように、その箇

所はいささか論義が煩雑で必ずしも重要でないと思えることも可能ではあるが、省略してしまふのは如何なものかと思つてゐる。『On the Three Realms』(Notes, p. 218 No. 53)とある。これは『大智度論』卷第七十(大正25・五四六。)に代表される「五衆(陰)世間・衆生世間・国土世間」といふ三種世間のことである。しかし、今こゝで言う三種世間は、華嚴家といふ「衆生世間・器世間・智正覚世間」の三であると解釈するのが妥当である。この

中、智正覚世間とは教化する仏身をいうのであるから、その注は「Three kinds of worlds; sentient beings, non-sentient beings (the material world), (the body of) the Buddha」とすべきと思つ。

「第三は『一乗十支門』についてである。この中、二度にわたつて「三種世間円融」(大正45・五一六、五一七)という語句があり、更には三種世間円融と同義として使用されてゐると考えられる。「三世円融」(同・五一七。)といふ語句がある。今は著者の「三種世間」に対する解釈に疑問があるのべ、それについて少しく検討してみた。まず初の「三種世間」は「the worlds of past, present, and future」(p. 135 / 28~29)であり、第二は「the three kinds of worlds」(p. 141 / 7~8)、第三は「the three worlds」(p. 141 / 20)と訳されている。これによつて最初の訳は三種世間を過現末の三世と見たものであり、これは明らかに著者の誤解に基づくものであることが窺える。第二、第三に関しては訳語上の問題はなから。ただ第二の「the three kinds of worlds」については注が付けてあり、それによつて「Three kinds of worlds: the world of the five clusters; the world of sentient beings (also called the world of provisional names); the world of lands (the material world).」(Notes, p. 218 No. 53)とある。これは『大智度論』卷第七十(大正25・五四六。)に代表される「五衆(陰)世間・衆生世間・国土世間」といふ三種世間のことである。しかし、今こゝで言う三種世間は、華嚴家といふ「衆生世間・器世間・智正覚世間」の三であると解釈するのが妥当である。この

最後の『妄尽還源觀』では、所引の『華嚴經』の經文中にある「隨其所樂・悉令見」(大正45・六三七。)が「according to what they enjoy, they are caused to see it (斜体字は筆者)」(p. 153 / 12~13)と訳されている。こゝかこゝの場合、「樂」は「樂」ではなくて「樂」の意、すなわち「願う・望む」の意と解すべきであり、「enjoy」は「wish」或いは「desire」と譯すべきであらう。更にもう一点を挙げれば、「又準入仏境界」(大正45・六三九)と讀むべきかと思われる所が「And accordingly we enter the realm of Buddhahood. Scripture says...」(p. 161 / 32~34)と訳されている。これは著者自身の注(Notes, p. 221 No. 34)にも「如来莊嚴智慧光明入一切仏境界經」とあり、その出典も明記されていることから「Scripture on Entering the Realm of Buddhahood」といふの經典各文に譯すべきではなからうか。

以上、個々の典籍の翻訳に関して、それぞれ特に気付いたことを述べたが、次に全体的な所感を述べることにする。

まずは著者の翻訳の勞を高く評価しなければならぬ。その勞苦の一端として、例えば「法」といふ語の翻訳が挙げられる。この語に対する訳には、「reality, principle, truth, teaching, things, element」など種々なる訳語が与えられている。この

ように「法」の一語に於ても、その意を汲んで翻訳しようとする著者の努力に対して大いに敬意を表するものである。また著者はそれぞれの典籍の翻訳にあたって、その典籍についての概説を付しているが、これはその典籍の概要を知る上で大変有益なものである。次に「方便」が所々に於て「technique」と訳されているが、これはやはり著者自身も使用している「means」或いは「skill in means」の方がよりふさわしいのではないかと思われる。ただ所々に於て不注意とも思われる欠落箇所があったのは残念なことである。大正大藏經所収本を底本と考えた場合、明らかに欠落と思われる所で、筆者が気付いた所は、後にまとめて補足することにした。

四

最後の「Appendix: Highlights of the Hua-yen Scripture (付・華嚴經のハイライト)」は、八十卷華嚴經に依りながら、六十卷華嚴經の品名及び各品の異訳をも列記しつつ、各品の概説をなすものである。そして、例えば「十地」などのような重要な用語には、その一に解説を加えているのを見る。この付編の中で特に注目に値するのは、「普賢三昧品」の項に於てその經文の全訳が付してあることである。ただ一点、品名の翻訳に関して、「十迴向品」の「迴向」が「Dedication」(p. 190)と訳されているが、これは「Merit-transference」とでもすべきかと思うのである。

五

本書全体を一貫して流れるものは、あくまでも仏教を単なる学問研究の対象に止めるのではなく、実践を伴った生きた宗教そのものとして捉えようとする著者の姿勢ではなからうか。その冒頭にある「個々と集団とを理解しようとする際に、華嚴思想は、多を個の不可欠な要素と見なし、また個を多の不可欠な要素と見なしている。一つの個は、総体的関係に対するのと同様に、他の個々に対する関連性に於て考えられるのである。一方、総体的関係は、個全体に対するのと同様に、各々の個に対する関連に於て考えられるのである。この観点が現代科学の經驗(experience)と一致することは明らかであり、またそれが、科学と生体倫理とに関わる問題——現代の関心事である——を解明し得るような、一つの有力な根拠となるように思われる。」(p. 213~23)は、そのような著者の立場を明らかにしているようである。それ故、教義即觀法と呼ばれる華嚴の觀法の書を中心として翻訳するに至ったというのではなからうか。そして華嚴教学の中心的課題である事事無礙法界、一即一切、一切即一などという教義の真髓に触れることによって、まさに学解とともに行証をめざす仏教の本質に迫ろうとしているようである。更にはそれを現代に敷衍ならしめようとする願いがあるように思えるのであり、そのような点に於て本書の価値があると考えられる。ただ本書に語彙及び索引が付してあるならば、研究者にとって裨益するところ更に大であったであろう。

先にも紹介したように近々『華嚴經』の英訳が公刊されるというところであるが、一日も早くこれが出ることこそ切望するものである。

(University of Hawaii Press, Honolulu, 1983, 222 pp. \$ 16.95)

翻訳に関して欠落と考えられる部分の補い

(典籍の底本はすべて大正大藏經第四十五卷所収本とした。傍線部分は欠落と考えられる漢文であり、斜体字はその英訳の文である)

『五教止観』

○ 何以故。法無分別故。(五一一^a)

...there is no person. Why? Because the truth has no discrimination. A scripture says...(p. 54 / 30)

『法界玄鏡』

○ 二探乱意者、唯取下句必与能依为所依。(六七四^c)

...depended on. Second, to eliminate wrong ideas, we simply take the text following that [emptiness] necessarily serves as that which is depended on for that which depends. Therefore...(p. 82 / 33)

○ 一理性融故、標約理四句。多事無礙故、標約事四句。

(六七七^c)

...“because of merging by the nominal nature”

introduces four points based on nomenclature. “because manifold things have no interference” introduces four points based on phenomena. (p. 97 / 38~p. 98 / 1)

○ 故云約理望事等。(六七九^c)

...without interference. Because the text says “in terms of nomenclature vis-a-vis phenomena and so forth”. The fact...(p. 108 / 13)

○ 由其相即故得互泯。(六八〇^a)

...to phenomena. Because of the mutual identification [they] can mutually disappear. Also, from...(p. 110 / 3)

○ 全住自一中。(六八一^a)

...things within itself. The all abide within its own oneness. Moreover, because...(p. 116 / 22)

『一乘十玄記』

○ 一即一切無過不離、無法不同也。(五一四^a)

...in the Hua-yen teaching, since one is identical to all, no error is not removed, no thing is not the same [as everything else]. (p. 126 / 6)

○ 第十隨生根欲性者，隨緣常心也。(五一五)

As for (10) adapting to the faculties, inclinations, and natures of beings, according to the condition, [the enlightened] always relates to [the sentient beings]. As it says... (p. 133 l 24)

『法界邊源觀』

○ 云何名煩惱，云何名菩提。(六三八)

...what is called nirvana? What is called affliction, what is called enlightenment? What is... (p. 155 l 16)

○ 又理即事故名隨緣，事即理故名妙用。(六三八)

...subtle action. Moreover, because noumenon is identical to phenomena, it is called according to conditions: because phenomena are identical to noumenon, it is called subtle action. Moreover, because the real... (p. 157 l 32)

○ 或以異境入定同境起。(六四〇)

...like this. Sometimes we enter concentration on different objects and emerge from the same object. Sometimes we enter... (p. 167 l 38)

○ 以表法界重重，猶如帝網無尺也。此明善財童子依此華嚴法界之理修行位極頓証法界也。此華一樓閣為主，一切樓閣為伴也。故云主伴互現帝網觀。(六四〇)

This represents the multiple levels of the cosmos of reality, which are infinite like the net of Indra. This shows that when Sudhana cultivates and attains the stage [of the Buddha] by means of the principle of the universe of the Hua-yen, he immediately realizes the cosmos of reality. This also shows that when one tower is brought up as the principal, the rest of towers are the satellites. Because it is called the contemplation of the net of Indra, principal and satellites, reflecting each other. (p. 168 l 25)